

間柄の自律

菊澤, 育代

<http://hdl.handle.net/2324/1937184>

出版情報 : 九州大学, 2018, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 菊澤 育代

論 文 名 : 間柄の自律

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

近代化以降、個人化の進行とともに社会や他者に関心を寄せない利己的個人主義と、個人が社会から孤立する孤人化が進んできた。本稿では、哲学者和辻哲郎により提唱された「間柄」を社会の基礎的な単位に置き、それを充実させること（＝間柄の自律）で、現代社会の抱える共同性の欠如や過度な利己的個人主義という課題の根底に迫ろうと試みる。

日本の近代化は、西欧が百年かけて到達した近代に一足飛びに追いつこうとし、その結果、そもそも外発的なものであることに加え、産業の近代化への偏重により、精神、政治・社会における近代化を伴わずに進められた。しかし、他方では、外発的性格とは別に、他者とのつながりという日本社会の内発的性格が存在する。それが「間柄」である。

間柄の自律が、個人化と孤人化という現代社会の病巣に迫ると仮定するのであれば、集団としての自律、あるいは近代的自我の確立以降長らく支持されてきた個人の自律を斥ける理由がなければならない。

まず、集団の自律による共同性の様態を見ると、例えば企業や大学は、理念に則り特定の目的を達成する集団として振る舞う点で、自律的な社会集団であることが認められる。見田（2006）は、人格的で自律した集団である「交響体」同士が、脱人格的で自律した集団である「連合体」として結ばれる形態を理想形であることを示唆する。しかし、たとえ企業が自律した集団として手厚い福利厚生を重視しようとも、集団の成員である上司と部下の間柄が充実していなければ過重労働や極度のストレスにさらされることは容易に起こりうる。集団が自律していても間柄は他律しうるのである。

次に、個人に目を向けると、人々は近代化とともに「個人」であることを求められ、自律の道を模索する。しかし、西洋とは異なり、個々人が宗教との強いつながりを持たない日本では、共同体の解体は、成員の価値体系の喪失を意味した。価値の源泉を見出せない個人は、他者との比較の上に自身の立ち位置を確認せざるを得なくなり、同調意識の増幅と大衆化を許す。そして、近代的自我に基づく「個人」としてのあるべき振る舞いが求められる一方で、その「個人」という観念自体に疑問が投げかけられる。つまり、個人の自由、責任、自律いずれにおいても、「個人」として完結するものではなく、主体の行動に対する他者からの反作用を受け入れることが必然とされる。人間は、他者からの影響を受けない「個人」であることはかなわず、常に能動性と受動性の双方向的な応酬を必要とする。

この両方向性は、他者との関係に生じる相互的な自律の概念、すなわち「間柄」の自律として供出できる。「間柄」は、近代的自我の単位である個体的な「人」とは異なり、関係体としての「人間」を基礎に置く。すなわち「人間」は、自主体と客体との関連性までを含めた関与的主体なのである。和辻は、関係体としての人間存在を重視しつつも、「間柄」を、人間の社会的役割によって成立する関係性と位置づけた。しかし、「私」という存在は、役割や資格に左右されるのではなく、固有で替

わりのきかない主体、すなわち「単独性」を有する存在であることが前提されなければならない。さらに、「間柄」は関係論に基づく構造を有し、A にとっての冷たい水が、必ずしも B にとっても冷たいとは言えないように、個別具体的な関係の中から倫理的価値が形成される。間柄に絶対的な倫理は求められず、常に目の前の他者との関係性の中で価値軸が形成される。特定の間柄で形成される倫理は、連鎖的つながりの中で洗練されることにより、一定の普遍性を持つことが可能となる。

共同性は、間柄が基底にあってこそ形骸化せず内実を伴うものとなる。これまでの共同性は、「目的」や「行動」を共通項として人々を束ねてきた。しかし、間柄を基礎とする共同性においては、エプロン・ダイアグラムと呼ばれる4層からなる論理的構図を持って、その共有概念の転換が示される。第1レベルにおいて多様な個性（信仰、哲学、民族）を持つ人間が、第2レベルにおいて一定の「原則」を共有し、それぞれが個別に第3レベルで具体的な目的を設定し、第4レベルで行動に移す。つまり、異なる哲学・価値観を有する者の間でも、「原則」を共有することで、平和運動や環境運動のような共同性を形成することが可能となる。この概念を下敷きに間柄の共同性を考えると、主体は「原則」のレベルにおいて相互連関性を持つことにより、普遍性を持つ正義や他律的な規範ではなく、互いに真に必要とされる倫理的原則を模索するようになり、また時間的経過や環境の変化とともに発展させることも可能となる。

日本社会の本流として存在する「間柄」に気づくこと、またそれを人間社会の根底に置き、充実させていくことこそ、個人化・孤人化からの脱却ならびに共同性の実現を可能にするのである。